

私たちの里山

かば

蒲

さわ

沢

やま

山



【 私たちの里山～蒲沢山について 】

かばさわやま 蒲沢山は、その 麓^{ふもと}には、川前小学校も位置する里地^{さとち}が広がって、現在6000人をこえる人々が暮らしています。また、その背後には、大倉や泉ヶ岳、さらには船形連峰につながる森林山岳地帯を有する大変^{ふところ} 懐^{ふところ} の深い里山です。

そのため、仙台市の中央から車で30分ほどの位置にあるにもかかわらず、クマやカモシカなどの大型哺乳類^{おおがたほにゅうらい} も生息^{せいそく} し（近年は、イノシシの出没も目立ちます）、人と野生動物が交差^{こうさ} して生活している貴重な里山です。山全体が水資源を蓄^{たくわ} える緑のダムとして水源涵養保安林^{すいげんかんようほあんりん} に指定され、近隣^{きんりん} 農家

への灌漑^{かんがい} 用水の供給をはじめ重要な役割^は を果たしています。芋沢川^{いもさわがわ} の支流^{しりゅう} である赤坂川^{かばさわがわ}、蒲沢川^{かばさわがわ}、銅谷原川^{どうやばら} の水源地^{すいげんち} でもあり、とくに山の中央を流れる蒲沢川は、



す イワナやカジカ、カワセミなども棲む美しい清流です。またカワナ（ホタルの幼虫のえさとなる）なども棲み、銅谷原一帯の水田では、今でもホタルが飛び交う姿を見ることができます。

山頂付近（標高300～360m）には、畑前^{はたまえ} の牧草地^{ほくそうち} が広がり、パノラマのような蔵王連峰^{ざおうれんぼう} の景色^{けしき} を見ることができます。

ます。この牧草地は、昭和40年代の初めから後半にかけて、らくのうしんこう酪農振興のために国有林と民有林の一部を切り開いて造成されました。緑のじゅうたんを敷き詰めたようなすばらしい牧草地ですが、近年、酪農の担い手の減少と高齢化が進むなかで、その維持管理がいじかんり困難になってきています。

蒲沢山は国有林で、スギ、ヒノキ、アカマツなどの人工林とコナラ、ミズナラ、モミ、イヌブナなどの自然



ま林とが混じった森で構成されています。この森は、国の天然記念物の指定をうけた青葉山と同じく、だんおんたいせいじょうりょくこうよう暖温帯性常緑広葉樹林と冷温帯性落葉広葉樹林との「境界領域」に成立するじゅうりん中間温帯林で、れいおんたいせいらくようこうようじゅうりん動植物の種類が豊富で生物多様性が高いことせいぶつたようせいで知られています。林床には春は、セリバオウレン、イワウチワ、カタクリ、初夏から夏にかけては、ヒメシャガ、ギンリョウソウ、ニッコウキスゲ、ヤマユリ、秋にはホトトギス、リンドウなど沢山の花をかんさつ観察することができます。

また、最近、山頂付近の沼で日本の固有種であるモリアオガエルの生息が確認されています。標高がかなり高い森林に住んでいることが多いので、この辺りで発見されるのは珍しいことです。

里山に暮らす人々

この里山が位置する地域は、もともと、水田や畑に囲まれた農村地帯です。さらに戦後移り住んできた人によって開墾^{かいこん}され、酪農も盛んに行われるようになりました。里山は、地域住民にとって薪^{たきぎ}集めや炭焼き、採集（山菜、きのこなど）、狩猟などの場として利用される大変身近な存在でした。今の赤坂ニュータウンのあたりに萱（かや）の刈場^{かりば}があって、この辺の農家は、それを用いて屋根をふいたそうです（さらにさかのぼれば、江戸時代には、定義^{じょうぎ}詣での中継ぎ地としても栄えたと聞きます。街道筋^{かいどうすじ}には当時^{しの}を偲^{おぼ}はせる道祖神^{どうそじん}や馬頭観音などが今でも残っています）。

ところが昭和の30年代に入り、燃料が石油に代わり、また、洗濯機や冷蔵庫が普及するなかで生活様式の「都市化」が進み、里山はいつしか地元の人にとってもほとんど立ち入ることもない、縁遠い存在になりました。

昭和から平成にかけてその里山を大きく変えるふたつの出来事がありました。ひとつは、その山林の一部を切り開いて宅地^{たくち}造成^{ぞうせい}が行われ、赤坂ニュータウン、高野原などの大型住宅団地が



つくりだされたことです。今では、4000人を超える人たちが暮らしています。造成の過程^{じょうちゆう}で、縄文時代前期^{たてあなじゅうきよあと}の竪穴住居跡

が22軒見つかり、縄文の時代から人々がこの地で生活していたことがわかりました（蒲沢山遺跡と命名されました）。

もうひとつは、青野木に大規模な産業廃棄物処理場さんぎょうはいきぶつしりじょうがつくられたことです。

新しく里山に移り住み、その豊かな自然環境みに魅せられた住民のなかから、里山の保全と里山を活かしたコミュニティづくりの活動が始まりました。そして、平成17年に、蒲沢山の国有林の一部が林野庁の「遊々の森」プロジェクトのひとつとして、「蒲沢里山体験の森」(面積262ヘクタール、東京ドーム57個分の広さ)という名称で認定され、子供たちの「環境教育」や市民の様々な自然体験を行う場として利用できるようになりました。

また、赤坂ニュータウンの水道タンクの少し先から蒲沢山に入る付近一帯が、川前小学校と大沢中学校の学校林になっています。昭和32年に、当時の学校関係者や地元住民の手でアカマツの大規模な植林が行われたそうです。



昨年、ちょうどその伐期ぼつきを迎えたのを機に、奥田建設会長の発案で地元の企業や町内会、PTA、里山ねっと赤坂などから数十人が集まり、久しぶりに下草刈りなどの整備が行われ、ずいぶん明るい林に生まれ変わりました。

里山は地域の宝

近年、日本各地で里山の衰退と荒廃すいたい こうはいが叫ばれていますが、それは、これまで里山を支えてきた農業や酪農、また林業の衰退と深く結びついています。それらの産業を元気にすることを抜きにして、里山の再生はありません。

さかのぼれば縄文の昔から人々はこの里山と共に生きてきました。さまざまに姿を変えてきたとはいえ、それぞれの時代を生きた人々の暮らしと思いが一杯つまった里山です。これからも私たちの手で、大切に守り育てていきましょう！

コラム ツリーハウス～里山の「遊びと学びの場」の拠点

赤坂ニュータウンの水道タンク脇わきから100mほど入った、ちょうど林道はさを挟んで学校林の向かい側の民有林の奥に、ツリーハウスができました。ツリーハウスとは、立ち木を利用してつくられた木の上の家のことです。今回、建設されたのは、地



面から土台までの高さが約2.5m、奥行き、幅は、ともに5m、その上に10平方メートル（約6畳）のログハウスとテラスが設置され、全体が高床式の山小屋風になっています。

柱や梁はりなどに使われている丸太の多くは、蒲沢山ばっさいで伐採さ

れたヒノキの間伐材^{かんばつざい}を森林管理署から安く譲^{ゆず}ってもらった
ものです。昨年の6月からとりかかり、大勢の人の協力を
いただきながら、里山ねっと赤坂の皆さんがすべて手作りで
完成させました。

階段を上ると、周りの林はもちろんですが、赤坂川^{はさ}を挟んで
対岸の青野木の集落もよく見えます。とくに秋から冬に
かけては、葉が落ちるので、あたり一帯の広々とした景色が
見渡せます。また、空が間近に感じられようになり、星空も
きれいに見えます。夜の里山の観察会も楽しみになりました。

大震災の時は、ツリーハウスはちょうど土台ができたところ
でしたが、幸い特に
損傷をうけることもな
く無事でした。5月には
タラの芽やコシアブラ
の若芽の頃に合せて、
「山菜を食する会」と
「ツリーハウスの見学
会」が行われました。



当日は、採りたての山菜を天ぷらなどにしていただきながら
交流しましたが、まるで森に突然レストランやカフェが
オープンしたような楽しい雰囲気^{ふんいき}になりました。

これからも四季折々、里山コンサートをはじめ様々なイベ
ントが予定されています。また、自然観察会や森の恵みを
活かした木工やつる細工講習会^{かいさい}も開催されると聞いています。
ぜひ一度、ご家族で足を運んでみられてはいかがでしょうか。